

## 仮訳

### Evidence Brief 4

#### 予防と対応の持続的な能力確保のための、地域の信仰共同体の関与

(世界人道サミット直前に出された) 潘基文国連事務総長の報告書「人道理念は一つ、責任の共有を (One Humanity: Shared Responsibilities)」は、現在の人道危機によってもたらされる前例のない挑戦を認識し、“私たち一人ひとりが共有する責任を受け入れ、それに

則り行動することを世界人道サミット

(WHS) の中心テーマにしなければならない”と呼びかけている。報告書は、討議および推奨行動の焦点である「核となる5つの責任」をあげている。JLIF&LCでは、これらの責任に関する事例集を作成した。各報告は、地域の信仰共同体 (LFCs) や信仰を基盤とした組織 (FBOs) によるそれぞれの責任に関連する役割について、鍵となる証拠をまとめ、重要な研究・文書のリンク先を提示し、宗教アクターがこの分野に効果的に参画していくための対話に向けての重要な論点や戦略を扱っている。



### LFCsの予防・対応のための持続可能な能力を保証する

#### 核となる責任 4 :

#### 人々の暮らしを変える——届ける支援から、人道ニーズ解消に向けた取り組みへ

ここでは、“人道上のニーズ、リスクおよび脆弱性の測定可能な削減の達成をもって、成功とみなすべきである”と呼びかけている。そのための3つの根本的な転換を以下のように示している。

1つ目は、国レベルやローカルのシステムを置き換えるのではなく強化すること。可能な限り地域に則し、必要な分だけ国際的であるべきである。人々やコミュニティのレジリエンスを私たちの努力の中心に据えなければならない。2つ目は、危機を待つのではなく、予測すること。データやリスクの分析に投資し、それに従って行動する。包括的な行動計画が、リスクに最も直面する20か国の対応能力を強化するために、2020年までに作成されなければならない。3つ目は、人道と開発の垣根を超えること。複数年の時間枠やそれぞれの比較優位性に基づき、集約的な成果を目指して活動する。国連機関や国際的パートナーは、これまでの分断傾向を乗り越え、任務内容、セクター、機関同士の境界を越えて仕事を行っていくことが要求される。そして、より多様なパートナーと共に、地域および国レベルのアクターの支援に向かっていくべきである。

LFCsは多くの場合、市民社会において、そのかなりの割合を占めている。しかし、人道サミットの事前コンサルテーションでは、公の人道調整メカニズムにLFCsが効果的に参画できていないことが何度も指摘された。人道援助活動が、LFCsの対応や能力に取って代わるのではなく、それをより強化するためにはどうしたらよいか。危機に陥りやすいというリスク削減のために、LFCsはどのような役割が果たせるだろうか。より長期の開発の視点を支えるため

に、LFCsの地域密着性と粘り強い存在をどのように活用することができるだろうか。

#### LFCsは、危機に対する地域のシステムのレジリエンスや対応の中核を成していることが多い

リベリア、ギニア、シエラレオネでのエボラ出血熱に対する対応では、LFCsが重要な支援を提供したことが報告されている。マーシャルとスミスは、LFCsが健康、教育、社会的支援にどのように貢献していたかを強調した。フェザーストーンは、エボラ発生当初に、隔離の陣

頭指揮をする際の地域の宗教指導者の役割を指摘した。そして、宗教指導者の権威が隔離施設への支持を得るのに重要であることに言及した。コミュニティでの宗教指導者の地位と信頼が意味する重要な点としては、人々を説得する声を有し、他の人道アクターが効果を出すのに苦労する地域で人々の態度を変革し、他者へのレッテル貼りを減らし、地域の人々を動員できるといった点がある。フェザーストーンはさらに、LFCsは国際団体に比べてリソースが少ないにもかかわらず、地域によっては物質的な支援を提供する最初の、もしくは唯一のアクターであったと指摘。宗教指導者はさらに、個人的なカウンセリングを行い、コミュニティの争い事を調停し、政府やサービス提供者に説明責任

を問うこともある。宗教的リソースは対応やレジリエンスに関する地域のシステムにとって核となるものであることが、遅ればせながら認識されたのである。

近年の研究の積み重ねで、他のLFCsも重要な支援システムとして役割を果たしている事例が多く報告されている。例えばヤンは、インドにおいてLFCsが難民のために社会サービスをどのように提供したのかを説明した。ベカロは、イギリスでLFCsがアフリカ難民に対し、ボランティア・ネットワークや建物などのリソースを提供したことに言及した。カワイからは、東日本大震災の際、地域の創価学会の施設や会員宅が、災害対応の一部として使用されたことが報告された。

### 事例：ミャンマー・バプテスト連盟（MBC）

ミャンマーでは、TearfundがMBCと連携している。MBCは、災害で最も被害を受けやすい傾向にある地域で活動する、5,000の教会のネットワークであり、毎年、ミャンマーに影響のある大なり小なりの人道危機に対応している。大規模なネットワークであるため、MBCは緊急時には、迅速に物資を集め、訓練されたスタッフやボランティアを動員することができる。MBCの連携の強みは、それが他の信仰グループや地域のNGO、政府にまで広がっていることである。村レベルでは、教会やその他の市民社会アクターを含めて設置された委員会が効果的な連携・協働が確保されるよう手助けをしている。その能力は、14州のうち12州を直撃し170万人が避難を余儀なくされた2015年の洪水の際に発揮された。MBCのネットワークは、洪水が起きて最初の数時間のうちに100以上の被災地域で、緊急のニーズの査定を行い、必要なものを確かめ、食糧やそれ以外の物資を配布した。



© World Vision International

### LFCsは、準備段階およびリスク削減の重要なアクターである

LFCsには、災害のリスク削減（DRR）や緊急時の対応における有効性を裏付けるいくつかの特徴がある。まずLFCsは、地域で共通の行動の基礎を成す物言いや価値観を通じて人々の脆弱性に挑むことで、DRRの努力に貢献できる。例えば、フィリピンのメトロ・マニラを台風ケツァーナが直撃したとき、カトリック系NGOのSocio-Pastoral Institute (SPI)は、洪水被害に遭った2つの区域で「共同体の形成」という独特のアプローチを使用した。イス

ラム、クリスチャン双方に共通する「奉仕の精神」に焦点を当てて、個々人が安易な自己利益から離れ、コミュニティ全体の状況改善に向けて、先を見通すことのできる「社会的な奉仕者」になるよう奨励した。

第2に、災害の解釈を形成する彼らの宗教的説話は、防災・減災に影響を与えることができる。例えば、ジンバブエにある「トランペットの音ジンバブエ」などの福音主義の教会ネットワークは、干ばつや食糧危機の原因を説明する「宗教的な文脈」に信を置いている。さらに彼らは、干ばつからの回復力を有する「保護農業」の技術を促進するための全国的キャンペーンにも参画している。

第3には、多くの国々でLFCsは、防災・減災を支えるのに重要な物理的資産を保有している。モスクの拡声器や教会の鐘などは、多くの地域で主要な早期警報システムになり、宗教施設は地域の防災計画においてしばしば重要な役

割を果たす。ウィズナーは、宗教施設が緊急時の避難所として頻繁に使われていると述べている。さらにLFCsは、「少なくとも、彼らの会議スペースや学校、その他の建物が洪水や地滑り、山火事などから安全な場所に、地震や風のエネルギーにも耐えられるように建設されることを保障できる」と推奨している。これらの有形資産は一般に、重要な社会的資産によって補完されている。この資産は、既存のボランティア・ネットワークや他のLFCsや幅広い市民社会アクターとの豊かな関係等も含んでいる。

地域レベル・国際レベルのFBOsとの連携など、幅広いネットワークにLFCsが参画していくことは、情報のさらなる普及と効果的な協力を可能にすると思われる。この文脈では、ムスリム慈善フォーラムが、人道支援の中で、信仰グループと共に活動する多くのローカル団体を設立したり協力したりするのを後押ししており、ソマリ救援・開発フォーラムやイエメン救援・活動フォーラムの発展に寄与している。この2つの団体は、巨大な外部団体が危険な状況を理由にアクセスできない地域にもアクセスすることができ、LFCsの潜在的付加価値を明確に示している。

### LFCsとのパートナーシップの機会が見逃されているが、より効果的な参画の成功事例も生まれている

LFCsが社会のいたるところで、危機に対処するために活動していることが明白な一方で、彼らの活動自体は人道システムから見落とされていることが多い。簡単に言えば、LFCsは軽んじられ、過小評価され、目的達成の手段として利用される傾向がある。例えばチームは、2005年のパキスタン地震の際のモスクの働きは“気づかれていないが重要であった”と説明している。ロビンソンとハンマーは、子どもに関して言えば、“最も有力な活動は、宗教関係の女性や青年グループによって注目もされずに行われている”が、そのことは見過ごされることが多いと語っている。マホニは、中央アフリカ共和国において、ほぼすべての宗教施設が国内避難民のキャンプに囲まれていることを説明し、LFCsの参画の欠如が、国内の現状分析を深刻なまでに限定させていることを証明した。この事例が物語っているのは、FBOsだけがLFCsに投資するのではなく、すべての人道団体がこうした地域のアクターと連携していく必要があるということである。

世界人道サミットに向けて、「人道支援と保護

の専門家グループ」(PHAP)が開催したコンサルテーションでは、多くの参加者から、人道活動における宗教的視点への寛容さの欠如と、LFCsの活動への偏見が強調された。参加者は同時に、非宗教者とFBOsのゴールが一緒になれば、パートナーシップを組む可能性も十分にあると主張した。信仰を基盤とするアクターと非宗教アクターの双方が、分断を乗り越えパートナーを組む機会を増やしていく必要がある。

政策プロセスや成果文書の多くは、宗教アクターの参画の増大を奨励している。例えば、UNICEF、イギリス国際開発省、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) の文書がある。しかし、こうした政策の実践への転換は、PHAPによるコンサルテーションで強調された「分断」によって妨げられている。



© Ali Wood/Tearfund

こうした疎外化は、宗教団体の過少利用につながる。Tearfundの調査は、性暴力に対処する教会の未開発の可能性に言及し、ウィズナーは、災害削減に向けての宗教コミュニティの未開発の可能性を強調した。

UNICEFのマッピングの活動は、宗教コミュニティの参画が、いかに広がりがあり実りあるものであるかを示している。調査でマッピングされた149地域のうち、68%の102地域は宗教コミュニティと共に活動している。その最も多い関わり方は、子どもたちの感覚を敏感にするための活動である。

“世界の終わりだと思った”  
- 台風ハイエンの被災者

---

## 核となるコミットメントと重要なアクション

「核となる責任4：人々の暮らしを変える一  
届ける支援から、人道ニーズ解消に向けた取  
り組みへ」に関連する、世界人道サミットの  
中核的コミットメントは、以下のとおりであ  
る。

### 中核的コミットメント1：

リスクと脆弱性を削減すると同時に、人々  
のニーズを満たす活動の新たな方法にコミッ  
トする。

### 中核的コミットメント2：

多年に及ぶ集合的な成果を支持することに  
よって、部分最適を避け一貫した資金繰りを  
可能にする。

LFCsとFBOsに関して見直された証拠は、こ  
れらのコミットメントを達成するために以下  
の重要なアクションを示唆している。

#### 1. LFCsの参画を促すための手順を見直す

もしLFCsが初動の危機対応において重要に  
なることが多いのなら、なぜ人道活動の努力  
の拡大が彼らの疎外化を引き起こすのか。危  
機対応の初期段階において活発な地域組織の  
持続的な参画を促すため、国際団体の手順に  
おける変化を確認する。

#### 2. 地域に根ざした人道支援に向けた調整の ための必要能力を確認する

地域の市民社会グループのより効果的な参画  
を確保するため、人道支援に必要な能力は何  
か。これらの能力をもとに、人道支援の調整  
役の“仕様書”を描き、同僚との議論の焦点と  
して使ってみよう。

## 3. グループ分類の文化を見直す

人道支援に活発な、地域の宗教グループの  
リーダーをまず集める。「グループ分類」と  
いった人道支援の調整メカニズムに対して、  
彼らが感じていることは何か。彼らの認識は  
どれだけ正当化されているか。地域での調整  
がこうしたグループにとってよりアクセスし  
やすいものにするには、どうしたら良いか。

## 4. LFCsやFBOsを重要な市民社会アク ターと見なす

人道支援の地域化に向けてのコミットメント  
が生まれた世界人道サミットでは、FBOsや  
LFCsが、地域においても国レベルにおいて  
も、市民社会組織や非政府組織の一部であ  
るとみなされていることを確認しよう。

## 5. 人道支援における信仰アクターの役割に ついて、研究への投資を増やす

信仰共同体の社会的・文化的な文脈に対する  
研究も同様である。

## 6. 寄付者や国連機関からの支援を増加さ せ、国際レベル、国レベル、地域レベルにお いてFBOs、LFCsの早期段階での参画を改 善する

彼らのユニークなネットワークと能力をより  
良く活用して、人道支援を改善し、適切なガ  
バナンスを促進し、脆弱性を削減する。

---

この事例集は、JLIF&LC Resilience HubのOlivia Wilkinson (Trinity College Dub-  
lin)、Alastair Ager (QMU, Edinburgh)、Tim Ingram (Tearfund)、  
David Boan (Wheaton College)、Nobuyuki Asai (Soka Gakkai)によって執筆された  
ものである。ここに示されている見解は、執筆者本人たちによるものであり、JLIF&LCや他の  
関係団体の公式な見解を示すものではない。

---